

学校教育目標		「生き抜く力」をつけ、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かで心身共にたくましい児童を育成する。				総合評価	
運営方針		○強い情熱と使命感を持った教職員集団で、子どもたちの「社会を生き抜く力」を育てる。 ○3G(言語活動、五條学、学校運営協議会)を大切にされた学校作りを推進して、保護者や地域の人々から愛される学校を目指す。				B	
平成30年度の成果と課題		本年度の重点目標	具体的目標				
OCSの活動が、子どもたちの心の成長を支えてくれている。 ○図書取組により、子どもたちの読書量が増えた。 ○児童それぞれの状況を把握したうえで、個々の課題にあった学習指導に努めることができた。 ○中学校教師の小学校への招聘、学校間での研究授業の交流等、中学校区3校合同研修を充実させることができた。 ●形式的な挨拶にならないための取組の更なる充実。 ●体力向上のための児童の現状分析と取組の計画。 ●効果的な研修計画の策定。 ●言語力向上のための取組の継続と、言語力向上の判断基準の検討。 ●読書活動を更に推進するための取組の検討。 ●「元氣アップ週間」の継続。各家庭でより意識できるような取組の推進。 ●家庭学習を充実させるための取組の検討。 五條中学校区3校の密なる連携と取組の更なる充実。 ●『五夢りん宣言』を実生活で更に意識させるための取組の充実。		◎確かな学力をつける。	○学習意欲を高める授業展開や指導の工夫を充実させる。 ○自主学習を定着させるとともに、質の向上を目指す。				
		◎豊かな心を育てる。	○他者との関わりを通して、自他ともに大切にすることができる子どもを育成する。 ○地域社会へ貢献したり、地域教育力を積極的に導入したりする活動を進める。				
		◎心身共に健康健全な生活を目指す。	○自ら進んで基本的な生活習慣を身につけようとする意識を高める。 ○めあてをもって根気よく体力や運動能力を高めることができる子どもを育成する。				
評価項目	具体的目標(評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果	成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策	
確かな学力をつける。	○学習意欲を高める授業展開や指導の工夫を充実させる。	主体的で対話的な深い学びの実現を目指し、標準調査全国平均を上回る。	B	B	問題解決型の授業展開は定着している。しかし、基本的な四則計算が未定着の児童も多く、それが標準調査全国平均を上回ることが出来なかった原因の一つと考えられるので、今後の課題といえる。	主体的で対話的な深い学びを実現するために、基礎・基本の学力を身につけることが大切である。反復した計算練習等も必要ではないかと感じる。	ペアやグループ学習を進めてくれているとのだが、具体的方策に示されている「対話的な深い学び」には子ども同士の話し合いがとて有効であると感ずいた。 ・現在先生方がPCを取り入れた授業を推進してくれている。プログラミング学習、GIGAスクール構想に向け、更に充実させていって欲しい。 ・朝のパワーアップタイムで各学年に応じた基礎基本の充実の取組を、今後続けていって欲しい。 ・学校の取組により、読書量が増えていることに驚いた。しかし、個人差があることが課題であるので、更なる取組の充実を期待します。
		わかる・できるを多く感じさせる授業を行い、授業が楽しいという児童を8割以上にする。	B		全体的な支援から個別の支援まで、様々な取り組みや工夫を行っている。しかし学力の二極化が激しく、支援の仕方も様々で、人数の多さゆえに目が行き届かず支援し切れていないこともあるのが課題である。		
	○自主学習を定着させるとともに、質の向上を目指す。	おすめの本の設定や読書貯金に仕組み、児童の平均読書冊数を一人40冊以上にする。	A		子どもたちの読書意欲を高めるための取り組みは継続して行うことが出来た。しかし、学力と同じように二極化が激しい。また、発達段階に応じた本を読んでいる児童も少ない。	読書も自主学習も、意欲が低い子への支援や工夫が必要である。また読書では内容を理解するまで読み切る力をつける取り組みを行う。	
		自主学習の手引きを活用し、モデルを通して、意欲的に取り組む児童を8割以上にする。	B		自主学習を進めるための声かけや、意欲を高める取り組みは行っている。しかし、意欲が高い子と低い子の差が激しく、また、低い子の割合が高い。		
豊かな心を育てる。	○他者との関わりを通して、自他ともに大切にすることができる子どもを育成する。	気持ちの良いあいさつの励行の徹底を図り、自ら進んで挨拶する児童を9割以上にする。	C	B	挨拶ができる児童が年々減っている。しかし、子ども自身は挨拶ができていると思っている。教員や地域の方と子どもたちの意識ギャップがある。	挨拶も自尊心も他者理解や相手を思いやる気持ちが大切である。自己理解から他者理解へとつながる取り組みが必要である。	挨拶はまだまだ、自主的な挨拶どころか、形式的な挨拶もできないことも。さらに推進していく必要があると感じる。また、原因究明のために、家庭での挨拶の状況等のアンケートを取ってみたい。 ・他者の考えや気持ちをくみ取ることが難しいが、友だちを思いやる、大切にすることを育ててほしい。 ・ふるさと学習については内外に胸を張って発信してもらいたい。 ・ゲストティーチャーの招聘など、学校が必要とする活動や取組の共有を更に進めていきたい。
		児童の自尊心の向上を図る取組を推進し、自他を思いやる気持ちを養い、学校が楽しいという児童を9割以上にする。	B		適切な場面で適切な褒め方を意識できている。しかし、自分のことで精一杯で、他者を思いやるまでにはいっていない子も多い。		
	○地域社会へ貢献したり、地域教育力の積極的導入をしたりする活動を進める。	ふるさと学習の深化、充実を図り、ふるさとを大切に思う心を育てる。	A		低学年から高学年まで、地域に足を運んで学習する機会を多くとっている。学習を進めていくにつれて子どもたちのふるさとを思う気持ちも高まっていった。	校内のふるさと委員会を機能させ、各学年でいつ、どこへ、どのような活動を行ったか、また誰を呼んだのか、地域教材、地域人材をまとめたものを作成して活用していく。	
		地域教材や地域人材を取り入れた活動の充実を図る。	A		ゲストティーチャーを招聘したり、地域の自然を学んだりした。また、将棋やスカイクロスなど、休み時間にボランティアの方と一緒に活動することもできた。		
心身共に健康健全な生活を目指す。	○自ら進んで基本的な生活習慣を身につけようとする意識を高める。	『元氣アップ週間』の取組を通して、基本的な生活習慣を定着させるために保護者と連携を図り、朝ごはんを毎日食べる児童を9割以上にする。	B	B	元氣アップをしっかり活用することができなかった。子どもたちも家庭でも形式的に行っていると感じている。	子どもたちに基本的な生活習慣を身につけようとする意識を高めるには、職員も意識して取り組んでいく必要がある。	朝ご飯と成績の因果関係は立証されている。朝食の摂取率は高いと伺ったが、朝食の大切さや、食事による学習効果等も家庭に発信して欲しい。 ・五夢りんの更なる有効活用をお願いしたい。挨拶のことで課題となっているが、意識面や行動面を再度話し合い、主体的に行動する児童の育成をお願いしたい。 ・昼休みに一輪車やなわとびなど、楽しそうに遊んでいる。友だち同士で教え合いをしている姿はとても微笑ましい。
		『五夢りん宣言』を実生活でさらに意識させるための取組を充実させ、規律ある学校生活の定着を図る。	B		宣言しているだけの状態になっていると感じる。五夢りん宣言の内容は、規律ある学校生活を送る上でとても大切なものである。		
	○めあてをもって根気よく体力や運動能力を高めることができる子どもを育成する。	1年間を通してなわとび運動に取り組むとともに、外遊びチャレンジ登録数を200以上にする。	A		継続してなわとび運動を行ってきた子どもは、力も意欲も向上させることができた。外遊びチャレンジも担当が前向きに活動することで、子どもたちも意欲的に取り組むことができた。	子どもたちそれぞれに合っためあてをもち、活動を行うことで、達成感が得られるようにしていく。	
		体育の学習等を充実させ、体を動かすのが好きだという児童を8割以上にする。	A		体育の授業で学習したことを休み時間の遊びに取り入れている子もいることから、体育の学習を充実させることが、子どもたちの運動意欲につながっていることがわかる。		
今年度の成果と次年度への課題		【成果】 ・様々な取り組みにより、子どもたちの読書量は着実に増えてきている。 ・自分たちが住んでいるまちについて調べ学習していく中で、ふるさとを大切に思う気持ちが育ってきている。 ・地域のお店や工場を見学したり、地域の自然とふれあったりする活動を多くとることができた。ゲストティーチャーやボランティアの方々から様々なことを教えていただくことができた。 ・外遊びチャレンジに積極的に取り組み、校内のなわとび運動を推進することができた。 ・子どもたちが興味をもったり、意欲的に取り組めたりする体育の授業を展開し、子どもたちが楽しんで運動する姿が、授業中にも休み時間にもみられた。	【課題】 ・学力の二極化が解消できていない。四則計算等の基礎的な学力を向上させていく必要がある。 ・挨拶の徹底がまだまだできていない。自分から挨拶ができるようになることを目指すため、挨拶の重要性や意義を職員で共通理解し、挨拶運動の推進を行ってきたい。 ・家庭学習や元氣アップ週間の充実を図るため、家庭との連携を更に密にし、取り組んでいかなければならない。				